

幼稚園や保育園では子どもが音楽に触れ合う時間が毎日あり、音楽に触れることは子どもの生活の一部になっていると言える。したがって保育者がしっかりとしたねらいをもつことが重要になる。しかし、実際に幼稚園で観察してみると、教師がしっかりとした目的意識をもつことなく、習慣的に音楽を使ってしまっている面があるように思えた。そこで、まず日常的に子どもたちと接している保育者の音楽教育観に焦点を当て、現場の体験に根ざした幼児教育における音楽活動の意義について検討しようと本研究を行った。

まず、幼児期における音楽の意義を明確にするため、教育要領からの音楽についての考えと、民間の保育雑誌からの音楽についての考えを読み取ることにした。

幼稚園教育の根本となる幼稚園教育要領では、「表現」の目標を「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」としている。その目標を達成するための音楽に関する内容としては、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」の1項目にとどまっている。音楽が楽しいと感じることが、どう表現の目標につながるのか、音楽を取り入れることのねらいや目的が具体的に示してあるわけではないと言える。

次に、保育者がクラス運営の参考にしているものの中に、保育雑誌があります。この保育雑誌には、現場の声に沿った音楽活動が掲載されている。そこで、52冊の保育雑誌に掲載されていた曲の説明文や挿し絵などから、主に何を目的にしているものなのかを分析した。その結果、次の5つのカテゴリーに分けられた。

- (1) 音楽的な内容が目的となっている音楽
- (2) 体を動かすことを目的とする音楽
- (3) 幼児の活動を盛り上げるための音楽
- (4) 言葉や、生活習慣を親しませようとする音楽
- (5) 親子や友達、保育者と触れ合うことを目的とする音楽

「表現」の目標をねらった(1)に分類された曲は77曲中14曲であった。これに対し、音楽を取り入れながらも「表現」以外の成長・発達をねらった(2)～(5)に分類された曲は77曲中63曲を占めていた。すなわち表現力や感性を養うために取り入れられている音楽は全体的に少ないことが分かった。

次に、個々の保育者は音楽活動にどのようなねらいや目的をもっているのかを明らかにするため、保育者3名にインタビューを行った。対象者は幼稚園教諭2年目の初任保育者2名と、幼稚園教諭を経て現在保育士15年目の熟練保育者1名である。時期は9月～10月にかけて、場所はそれぞれがリラックスできる雰囲気のところを選び、保育者が自由に話せる環境で行った。

インタビューの後、それぞれの考えをまとめるためKJ法による分析を行った。その結果、

保育者の音楽教育についての考えは次の3点である。

1つめは、音や音楽は子どもの気分や行動に変化を与えることに役立つ。

2つめは、歌によって子どもの感性を育てることができる。

3つめは、音楽のよさや楽しさそのものが意義である。

ここでは、熟練保育者と初任保育者の考えに違いがあった1と3の項目について述べていきたいと思う。

1つめの「音や音楽は子どもの気分や行動に変化を与えることに役立つ」ことについては、ほとんどが初任保育者の発言の中に見られた。逆にこの考え方に関係する熟練保育者の発言はごくわずかであった。このことから初任保育者のほうが音楽は気分や行動に変化を与えることができると考えている傾向にあることが伺われた。

3つめの「音楽のよさや楽しさそのものが意義である」ことについては、熟練保育者と初任保育者の考えに違いが見られた。

インタビューの全体を通して、熟練保育者と初任保育者には考え方の相違があることが伺われた。

熟練保育者は、園生活の中に取り入れる音や音楽を選び抜いて、子どもの感性を育てたり自己表現ができるようになっていくことを期待する傾向にあった。その背景には、いい音楽に接することは、生きていく中で壁にぶつかったときの支えとなる力があるとの考えがある。ここから、音楽の教育効果に対する信頼の深まりが見られる。

これに対し初任保育者は、子どもは単純に音楽が好きだから、音楽を取り入れて楽しく活動ができればよいと考える傾向にあった。初任保育者は、一時的な気分や行動の変化をねらって音楽を取り入れることが多く、音楽に対する考えも「音楽は楽しいものだ」という漠然とした考えにとどまっているように感じられた。

なぜ熟練保育者と初任保育者とでは音楽に期待するものが違うのだろうか。

それは熟練保育者のような体験から培われる音楽の教育効果に対する信頼感が、初任保育者にはあまり形成されておらず、表面的な信頼しか寄せていないことが考えられる。

インタビューを行った熟練保育者Cの話の中にも、自分が初任のうちにはただ子どものために作られた歌を歌わせているだけだったという話があった。そこで熟練保育者の考えが変わるきっかけとなった他園での経験について話してもらった。

(他の)保育園を見学に行ったときに、エッ！てカルチャーショックやったとよ。(その保育園の歌は)子どもから湧き出てる感じがしたとよ。(中略)今まではなんか子どもに合わせて歌ってたのが、あ、私が歌うっちゃ～、子どもに合わせて歌う必要はないんだな～って。結局(それまでは)子どもに歌わせようとして合わせてうたってた歌やったってことやね。(中略)そこ(見学に行った保育園)でうたってた歌は、自分が歌えたとよね。自分がすごくいい歌やなあって思えたし。そこが全然違うな～って思って。

熟練保育者はこのような経験から日常生活に取り入れる音楽を見直した。

熟練保育者は園生活に取り入れる音楽を勉強していく中で、「音楽には人間の支えになる力がある」と考えるようになった。熟練保育者 C は、その後も幼児期に歌った歌を口ずさみながら辛い出来事を乗り越えた人や、中学校時代の音楽の授業で歌った歌がなかったら今の自分はないという人の話を聞き、子どもにも生きる上で精神的な支えとなるような音楽をもってほしいと思うようになった。そのために熟練保育者は、曲を作った人の思いに共感して歌える曲や、人間の思いが込められた民族音楽、世界で評価されている音楽家の曲を取り入れたり、様々な楽器の生演奏を聴いたりするなど、子どもがたくさんいい音楽体験ができるように工夫をしている。

このように熟練保育者は、大人も子どもも分け隔てなく、誰にでも共感できる音楽を幼児期の活動の中に取り入れることが、いつまでも音楽に親しむことができ、音楽が精神的な支えになり得るという信頼感を持っている。

これに対し初任保育者は、インタビューの話の中で、音楽を取り入れる活動に求めるねらいや目的はこれだ、という答えがはっきりと出てこなかった。ここから初任保育者が、音楽と触れ合うことは大事だと考えてはいるものの、音楽活動に対する考えが明確ではなく、あいまいなねらいにもとづいて音楽を取り入れた活動をしていることが考えられる。

つまり、保育者は経験を積むことによって、音楽に対する信頼感を形成していくと考えられる。したがって、経験の浅い初任保育者は、音楽の表面的な効果しか信頼できていないので、一時的な行動の変化を期待して音楽を取り入れる傾向にあることが明らかとなった。

そこで今後の課題としては、

- (1) 保育者養成の段階で豊富な音楽体験をすること。
- (2) 幼稚園教育要領「表現」のねらいや目的を明確に記述すること。
- (3) 音楽本来のよさを感じられる教材開発をしていくこと。

の3点が考えられる。特に、(3)の音楽本来のよさを感じられる教材開発をしていくことは、民間の企業はもちろん、一人ひとりの保育者も音楽についての考えを深めていくことが重要である。私自身も、この研究で得た一つの仮説を、今後さらに追及し、幼児期の音楽教育につなげる努力をしていきたい。